



Title	日本近代児童文学における 死と生命の表現 の研究：『赤い鳥』童話作品を中心として [全文の要約]
Author(s)	王, 玉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12954号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70205
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Wang_Yu_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：王玉

学位論文題名

日本近代児童文学における〈死と生命の表現〉の研究
— 『赤い鳥』 童話作品を中心として —

・本研究の目的

近代日本文学研究において〈生と死〉は主要なテーマの一つであり、長い研究の蓄積がある。一方、近代日本児童文学における〈生と死〉の研究はそれほど進んでいない。とりわけ〈死〉に関しては、児童文学全体におけるその扱われ方や表現の特徴の解明はおろか、個々の作家研究においてもほとんど研究テーマとならないのが現状である。

本研究の目的は、近代日本児童文学作品の中で描かれる〈死〉に注目し、その描かれ方や表現の特徴、〈生〉との関係、作者の意図などを明らかにすることである。そのさい、児童雑誌『赤い鳥』に掲載された童話作品を対象とする。『赤い鳥』が刊行された大正から昭和初期の日本社会は乳幼児死亡率が非常に高く、〈死〉は子どもの身近にある、日常的な現象であった。それゆえ、子どもをめぐる〈死〉は、児童雑誌の編集方針や個々の作品に少なからず影響を与えていると考えられる。児童雑誌の掲載作品を作者の思想からはもちろん、雑誌の編集方針との関係からも分析することで、当時の児童文学における〈死〉や〈生〉の描かれ方だけでなく、社会の子ども観も明らかにできると考えている。

・本論文の構成

本論文は二部構成となっている。第一部にあたる第一章から第五章では『赤い鳥』に掲載された昔話の再話作品および創作童話の中の〈他者の死〉に焦点を当て、親など身近な人や動物の〈死〉や、それらの〈死〉に対する子どもの向き合い方がどのように描かれているか等を検討した。

第一章は、『赤い鳥』に掲載された欧米の昔話の再話作品における、〈殺す〉〈殺される〉〈食べる〉〈食べられる〉場面に焦点を当て、それらの描写の特徴を『赤い鳥』の編集方針との関係から検討した。

第二章は、『赤い鳥』に掲載された創作童話作品における、子どもの身近にいる動物の死と、それに対する子どもの感情の描写の分析を通じて、『赤い鳥』の創作童話作品の芸術性を検討した。

第三章は、森田草平の創作童話「鼠のお葬ひ」を対象に、子どもの遊びと動物の死との関係や、子どもによって遊びの最中に殺された動物の、物語における位置づけを検討した。

第四章は、『赤い鳥』に掲載された童話作品の中で子どもが他人の死に直面する作品に注

目し、①〈他者の死〉と物語の意図、②社会批判および文明批判としての〈他者の死〉、③〈他者の死〉に遭遇した子どもと喪失体験の感情表出という三つの観点から、子どもの〈身近な人の死〉を検討した。

第五章は、宇野千代の「三吉とお母さん」に描かれた三吉と母親の死別の検討を通じて、『赤い鳥』童話作品における親子の死別をめぐる表現の特徴と、児童文学におけるその意義を明らかにした。

第二部にあたる第六章から第十一章では、『赤い鳥』に掲載された創作童話の中の〈子どもの死〉に焦点を当て、子どもの目から見た〈死〉の描かれ方の特徴や〈子どもの死〉に込められた作者の思いなどを検討した。

第六章は、『赤い鳥』童話作品における〈子どもの死〉の表現を大きく〈超自然的な要素を含んだ子どもの死〉〈日常世界における子どもの死〉〈子どもの目から見た子どもの死〉の三つに分け、それらの特徴を個々の作品の分析を通じて概観した。

第七章は、キリスト教徒としても知られる宮原晃一郎の「身に咲いた花」を対象に、宗教的要素の強い作品における〈子どもの死〉の描かれ方の特徴、およびそれと宗教との関係を検討した。

第八章は、下村千秋の「曲馬団『トッテンカン』」を対象に、創作童話が昔話の何を踏襲し、どのように独自性を出しているのかを、機能という観点から考察した。

第九章は、加能作次郎の「少年と海」を対象に、童話作品における子どもの〈死〉に対する認識および心理とそれらに基づく言動、そして〈子どもの死〉に関する描写の特徴を、心理学の理論などを援用しながら分析した。

第一〇章は、『赤い鳥』に掲載された坪田譲治の童話「小川の葦」における〈子どもの死〉をめぐる表現の分析を通じて、坪田の童話における〈子どもの死〉という主題の位置づけや、同じ時期に書かれた坪田の他の作品の〈子どもの死〉表現との異同を考察した。

第十一章は、『赤い鳥』に掲載された小川未明の「町の天使」と「金の輪」という二つの創作童話で描かれた〈子どもの死〉の比較分析を中心に、『赤い鳥』の未明童話における〈子どもの死〉の描写の特徴や、未明童話における〈子ども像〉の変遷等を検討した。

・結論と今後の課題

本研究を通じて、〈豊かな空想、真の芸術性、現実的な話材〉を求めた『赤い鳥』の童話作品は、主に次のような目的をもって〈死〉を描いていることが明らかとなった。

- ・子ども特有の認識や行動のしかたがあることを示すため（第二章、第九章）
- ・〈死〉が〈生〉の終焉ではなく、時間と空間を超えた新たな関係性を生み出す契機であることを示すため（第二章、第一〇章）
- ・読者に〈死〉や〈生〉、〈死後の世界〉について考えてもらうため（第三章）
- ・子どもが後悔、反省、悲しみ、喪失感など、複雑で豊かな感情を持っていることを示す

とともに、他者が抱く感情への共感を呼び起こすため（第四章）

- ・経済的な利益や有用性が優先される社会への批判、または近代文明そのものに対する批判（第四章、第八章）
- ・子どもの純真さ、無垢さを称えるため（第七章）
- ・〈生〉の真の意義を理解させるため（第一章）

『赤い鳥』は主宰者の鈴木三重吉が童心主義を提唱したことや、小川未明や北原白秋といった作家が作品を発表していたこともあり、大正時代の童心主義児童文学運動をけん引する雑誌とされた。

しかし、掲載された童話作品における〈死〉の描写を分析して明らかになったのは、作中で描かれた子どもたちが童心主義の唱える〈純真無垢な子ども〉とは一概に言い切れない、多様な側面を持っていることである。少しでも長生きできるよう可愛がってきたほたるが従妹に持ち去られたことで、従妹への腹いせとしてほたるが早く死ぬことを期待するようになる子どもや（森三郎「ほたる」）、心臓の病気が悪化したことで遊びに来られなくなった友人の病気を心配しながら、来られないことに対して不満と失望を露わにする子ども（森三郎「ほたる」）、自分たちで鼠を溺れさせ、鼠が生きようと必死にもがく様を見て笑い、興奮する子どもや（森田草平「鼠のお葬ひ」）、まわりの目を終始気にしながら、自分より不幸な境遇にある友人を見て安心し、〈自分は不幸ではない〉という自己イメージを作り上げている子ども（宇野千代「三吉とお母さん」）等、純真無垢で善良な子ども像とはまったく異なる、複雑な感情を持ち、自分本位な一面や無邪気さゆえの残酷な一面を見せる子ども像を確認することができた。そうした多様な子ども像は、豊かな空想や芸術性の追求を編集方針とする『赤い鳥』における、現実性の追求のあらわれと見ることができよう。

本研究は、近代日本児童文学における〈死〉の表現の多様性や、〈死〉と〈生〉との関係性などについてはある程度明らかにできたと考えている。しかし、〈死〉と対になる〈生〉に関しては、十分な検討を行うことができなかった。今後の課題としたい。